子どもとともに。

校長室から

愛知県小牧市小牧中

「役に立つ」って楽しい

下

十七日の日曜日、愛知県小牧市のラピオ通り商店街に元気のよい声が響き渡った。「こんにちは！」「ありがとうございまーす」。ポップコーンを手際よく作り、カップに詰める。それを、商店街で買い物をして引換券を持ってきた人に渡す。にこやかに、小さな子どもには身をかがめて。

任されているのは、小牧中学校の田井愛弓さんら三年生五人。ボランティアだ。毎月第三日曜にある「楽美音城見市」でこの仕事を受け持つ。メンバーは「役に立っていると言われ、やりがいがある」と楽しそうだ。

同校では、二〇〇〇年ごろから「注文ボランティア」という活動を始めた。地区や団体の依頼を受けると、生徒から参加者を募り派遣する。玉置崇校長が、子どもたちの輝く姿で思い浮かべる一つが、この活動だ。

文部科学省の指定を受け、ボランティア教育に取り組んだのがきっかけで生まれた。当時、教頭だった玉置校長は「子どもが地域の人を助ける人になってほしいと考えたんです」と語る。

商店街のイベントでボランティアをする生徒たち＝愛知県小牧市内で

そのころはチラシを配ると、一人暮らしのおばあさんが「切れた電球を換えて」、「カラオケを一緒に歌って」という人もあった。今は個人の要請こそないが、地区の運動会や市民まつりの手伝い、秋祭りのみこしの担ぎ手、児童センターの遊びの指導など幅広い。

件数も、昨年度は地区や団体からの申し込みが十九件あり、約三百七十人の生徒が参加した。こしは現在までで十五件、約三百人に上る。

「活動の幅が広がっているだけでなく、生徒の姿勢も深まっています」と言うのは、担当の冨田賢史教諭だ。田井さんらも初めは注文ボランティアとして派遣されたが、今は城見市の主催者と直接やりとりする。

メンバーは「内申書が良くなるからと言う人もいたけど、それじゃ長くは続かない。人との付き合い方やチラシの配り方など、学ぶことはいろいろあった」と話す。

学校は、とかく成績や部活動などを中心に生徒をとらえがちだ。しかし「子どもは何でも得意というわけではない。役立ち感も生きがい感につながる。さまざまな力を発揮できる場が、子どもには必要だ」と玉置校長。

「高校生になっても続ける」。迷いのないメンバーの声がそろった。

（川本公子）